2020年8月23日 久宝教会 聖霊降臨節第13主日礼拝

メッセージ「神様の働かれる畑」　　牛田 匡 牧師

聖書　コリントの信徒への手紙Ⅰ　3章1－9節

この8月は、原爆や戦争について思いを馳せる時期ですが、また「お盆」ということで、ご先祖様や亡くなった方々、そして命というものに思いを馳せる時期でもあります。例年ならば、お盆にはお墓参りに行ったり、またお家にお坊さんに来てもらったりするのに、今年はコロナのせいで、お寺でも人が集まっての法要が出来なかったり、檀家さんからも「家には来ないで下さい」と言われたりして、お寺にとっても、今までにないお盆だという話を耳にしました。

今日も私たちの教会では、この礼拝の後に、釜ヶ崎の方々のための「おにぎり作り」をしますが、寄せ場の町、釜ヶ崎でもコロナの陽性者が出たということで、毎年恒例の夏祭りが中止になったそうです。例年だと三角公園に盆踊りのための櫓(やぐら)が組まれ、歌や踊り、音楽の演奏などがあるそうですが、今年はそれらがありませんでした。しかし、そのような中でも、この1年間に釜ヶ崎で亡くなった方々を偲ぶ「慰霊祭」だけは短く行われました。昨年からの1年間の間に、名前が分かっていて、夏祭りの実行委員会に報告や連絡があった方々だけで、145人の方々が亡くなられたのだそうです。ですので、実際には、恐らくその2倍か3倍の数の方々が、釜ヶ崎では亡くなられたのではないかと言われていました。そのような今年の慰霊祭でしたが、それでも釜ヶ崎の内外、遠くから近くから、多くの方々が集まって来ていました。追悼される145人に直接の面識があるかないか、また仏教式か、キリスト教式かというような宗教宗派の枠組みも越えて、三角公園に集まった大勢の人たち皆で、亡くなった方々を偲び、命というものに思いを馳せるひと時を持ちました。

建物としてのお寺でも教会でもない、いつもの公園で、特定の宗教や信仰を共有しているわけでもない人たちが、その日その時に亡くなった仲間たちを偲んで、追悼の祈りを一緒に捧げる……。それはとても自然な光景でしたし、参加した一人一人の方に、目には見えませんが、その場に共にいて下さっている神様や仏様の存在を、ふっと感じさせてくれるものだったのではないかと思いました。この世界には、そのような特別なひと時が確かに存在している一方で、私たちの日常は、自分と他人との間に様々な境界線を引き、時間や数字など、目に見える結果や成果というものに追い立てられているように感じます。それこそ「そうでなければこの社会の中で生き残っていけない」かのように、望む望まないに関係なく、皆が必死に走り続けないといけないような状況に置かれている。そのために、競争もあれば、妬みもあり、対立もあれば、分裂もあるのではないかと思います。

今回の聖書の言葉は、コリントの教会の人々に宛てた一致を勧めるパウロの手紙でした。コリントの町は、地図を見ると分かりますが、ギリシア本土と半島とを結ぶ所にあり、紀元前9世紀の頃から、交通・交易の要所として栄えた都市でした。紀元1世紀のパウロの時代には、ローマ帝国アカイア州の首都であり、ローマ人、ギリシア人、ユダヤ人など多様な民族が暮らしていた巨大な都市でした。「多文化都市」と言うと、聞こえは良いですが、実際は一部の特権階級が、大多数の奴隷たちを支配し搾取していた、分断と対立に満ちた世界でした。

現代でもそうですが、経済的に発展した豊かな都市には、搾取の結果として貧困も生じます。そしてそのような都市の中で「世の愚かな者」「世の弱い者」「世の取るに足らない者や軽んじられている者」「無に等しい者」とされていた人たちが、コリントの教会を作っていたと『コリントの信徒への手紙Ⅰ』1章には記されています（1：26－28）。そして、そのように社会の中で弱く小さくされた人たちを中心としたコリントの教会でしたが、その教会のメンバー全員が全員、その日のパンにも事欠くような極貧の状態だったかと言うと、そういうわけでもありませんでした。教会のメンバーの中には、皆が集まって礼拝をするための会場として、自宅を提供出来る人がいましたし、皆で一緒に食事をするために食事を持ち寄ったりすることの出来る人たちもいました。それらは当初は、自発的な好意や奉仕であっただろうと考えられますが、やがてそのような違いが、お互いの中の溝や対立を生み出して行くものにもなってしまいました（11：17－22）。

『コリントの信徒への手紙Ⅰ』11章には、その日の仕事を早く終えて、教会での集会に食事を持参出来る人がいる一方で、遅くまで仕事をしていて、空腹のまま手ぶらで駆け付けねばならない人もいたということが記されています。それにも拘（かか）わらず、先に来た人たちが後から来る人たちの分を残しておくことなく、食べたり飲んだりすることがあり、パウロはそのような人々に対して「（あなたがたは）神の教会を軽んじ、食事を持参しない人々を侮辱（ぶじょく）するのですか」（11：22）と厳しく言い、なおかつそれは「ふさわしくないしかた」（11：27）であると告げています。このように、富や権力、暴力によって、強い者が弱い者を支配するというような世の価値観とは異なった、神様の価値観によって集まった教会の中においてすら、残念なことに常に妬みや争い、対立や分派争いがあったわけです。

そのような理解の上で、今回の箇所3章4節ですが、コリントの教会の中である人は「私はパウロに付く」と言い、またある人は「私はアポロに付く」と言っていたそうです（3：4）。しかし、パウロは手紙に記しました。「アポロとは何者ですか。パウロとは何者ですか。二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えに

なった分(ぶん)に応じて仕える者です。私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです」(5－7)。

この言葉は2000年前のコリントの教会の人たちにとっても、また実際の農作業からは離れてしまった現代の私たちにとっても、分かりやすい言葉だと思います。命の神様の働きが無ければ、人間がいくら種を植え、水を注いだとしても、種が芽を出し、育つことはありません。肝心なのは「どの人の言葉がより正しいか、立派か、価値があるか」ではなく、命を与え、育んで下さる神様です。そしてパウロは「あなたたちは神の畑、神の建物なのです」(9) と続けています。「たとえ今は分裂、対立していたとしても、そんなあなたたちも神様の働かれる畑です、神様の建てられる建物です。そのことを忘れずに、覚えていてください」ということでしょう。

さて、私たちは自分自身を「神様が働かれる畑」だと思えているでしょうか。それぞれの生まれ育ちがあり、学びがあり、経験があり、そして今があります。それぞれの場所、それぞれの時に、並々ならぬ努力もあり、苦労もあり、また失敗や挫折もおありだったでしょう。それら全ての経験があって、今の自分がある……。自分の計画通りに行ったことよりも、むしろ計画通りに行かなかったことの方が多いかもしれませんが、それでも、ともすると「私の人生」「自分の命」と思い込んでしまっているかもしれません。神様から与えられ、生かされている命……。神様が働かれる畑である私たちは、一体どんな作物を育てるために用いられるのでしょうか。今、目に見える形での作物があったとしても、また目に見える実りという成果が無かったとしても、神様の計画されている実りはまだこれからかもしれません。

1年前や半年前には、この新型コロナウイルスという新しい病気によって世界中がこんな状況になるとは、私も含め、ほとんどの人は考えてもみなかったと思います。この後の、半年後や1年後の社会の状況もまた、今とは全然異なっているものになっているかもしれません。そのような時だからこそ、今までに手に入れた成果や形にこだわるのではなく、「私は誰かに付く」と言うのでもなく、他でもない神様が、共にいて働いてくださる畑であるということを思い出したいと思います。

神様は立派な建物の中や、高価なお供え物の前におられるのではありません。世間から見向きもされない寄せ場・ドヤ街の、名もなき人たちと共におられます。コロナの影響を受けて今、困っている方々と共におられます。その神様からの力と励ましを頂いて、分裂と対立ではなく、和解と一致を目指した歩みへと、私たちは今日も導かれて行きます。